

**令和6年度 第1回地方独立行政法人京都市産業技術研究所
評価委員会 会議録**

日 時：令和6年8月7日（水）午前9時30分～午前11時15分

場 所：京都市産業技術研究所 2階 ホールA・B

議題：（1）委員長の選出

（2）令和5年度の業務実績評価について

（3）その他

議事要旨：

・以下、各委員の質問・意見など（○：委員、●：京都市、◎：産業技術研究所と表記）

【1 開 会】

・砂川 京都市産業観光局長からの挨拶

【2 議 題】

（1）委員長の選出

・増田委員を委員長として選出

（2）令和5年度の業務実績評価について

～事務局から評価の流れについて説明～

～京都市から資料1及び資料2に基づき評価案について説明～

○： 「簡易受託研究制度」の状況は。本制度の実績は、数値目標で定めている共同研究の件数に加えられているか。

●： 令和5年12月から開始している簡易受託研究制度の令和5年度の利用実績は1件である。また、簡易受託研究制度は受託研究に区分されているものであるため、今期の指標である共同研究の件数には含まれていない。

◎： 令和6年度は4件の申込みがあり、今後も増えていく見込みである。

○： 自己収入の内訳を教えてください。

●： 補助金収入が約1,800万円、補助事業収入が約3,100万円、受託研究等の収入が約5,000万円、本市からの委託事業を含む受託事業収入が約8,500万円、試験分析や設備利用等の事業収入が約6,300万円、その他雑収入が約4,700万円である。

- ◎： 令和4年度と比較して、約3,400万円の増となっている。国からの外部資金である「地域DX促進環境整備事業」約3,000万円の確保が主たる要因として挙げられる。令和6年度も引き続き、積極的な外部資金の獲得、財源確保に努めてまいりたい。
- ： 機器等の使用料・手数料を改定したことにより、利用件数の減など、利用促進の面で影響はあったか。
- ◎： 使用料・手数料を改定したことにより、サービス利用が控えられるということは起こっていないと考えている。むしろ中小企業からの依頼試験は増加してきており、また、多種多様で質の高い高度な利用案件が増えてきていると感じている。
- ： 研究員が利用者を訪問しニーズをくみ取る「御用聞き型企业訪問」は、待ちのスタイルから積極的に訪問されている点は素晴らしい。京都には様々な業界があるが、具体的にどう進めていくのか。
- ◎： 産業技術研究所の強みである技術で支援できる業界を拡大していく必要がある。例えば、A C T京都の入居企業を訪問し、産業技術研究所ユーザーズコミュニティへの勧誘活動や産業技術研究所を知っていただくための取組を行うことで、コミュニティの会員数や新規利用者数の増加につながっているところである。
- ： 先日、産業技術研究所ユーザーズコミュニティのキックオフミーティングに参加させていただいた。120～130人の参加があり、これだけ多くの人が集まったことは経験のないこと。現状に満足することなく、更なる発展につなげていっていただきたい。
- ◎： 外部の展示会に積極的に出向いた活動の中で、漆喰を取り扱う建築士事務所から相談を受け、産業技術研究所が持つ染織技術を活用し、白以外のカラーのバリエーションの漆喰を実現した。これまで産業技術研究所とはつながりのなかった新しい分野への事業者支援の実現につながった。
- ： 産業技術研究所が行っている技術支援のうち、伝統産業の技術継承に資するものというのは、全体のうちどれくらいの割合を占めているのか。
- ◎： 近代産業と伝統産業とで研究職員を区別しておらず、比率で表すのは困

難であるが、概ね件数としては半々くらいである。

- ◎： 西陣織の業界では従来から使用している織機の部品が無くなってきているが、これらを代替部品によって維持していく支援や、ロボットを導入することで生産工程を改善するF A（ファクトリーオートメーション）化など、伝統産業と近代産業を同時並行で進めているというのが現状である。
- ◎： 補足であるが、機器設備の利用料金の値上げについては、京都市の伝統産業74品目の事業者は、旧料金を適用することとしている。
- ： 入口が伝統産業であっても、出口が先進産業など、市場を拡大していくための支援が行われているのは良いこと。引き続き取り組んでいただきたい。また、情報誌については紙だけでなく、デジタルでもいただけると社内共有しやすくありがたい。
- ： 伝統産業を継承していくことは重要であるが、これらの技術については、A Iの活用が難しいと聞く。産業技術研究所ではこういった取組や研究はされているか。また、京都には大学発ベンチャーが多いが、ベンチャー企業の発掘や連携促進は、どのように進めているか。
- ： 京都市では、アステム（京都高度技術研究所）が中小・ベンチャー企業の経営面の支援をしており、産業技術研究所では主に技術面からの支援を行っている。アステムが行うベンチャー企業目利き委員会では、コーディネーターがベンチャーの発掘から成長支援まで一貫した支援を行っており、これまで160社をAランク認定し、令和5年度に1社、計7社の企業が上場している。これら企業が技術的な課題を抱えている場合には、産業技術研究所と連携して解決策をアドバイスするなどしているところである。
- ◎： 伝統産業におけるA Iの活用についてであるが、伝統産業の良さの1つは手づくりであり、これらをA Iによって代替してしまうことは考えていない。一方で、担い手不足への対応は必要であり、例えば西陣織の製造工程において異常が発生した際や西陣織の柄をデジタル化するといった場合に、A Iを用いてチェックするなど、人間が介在しなくても良い部分ではA Iを活用したいと考えている。
- ： 技術指導において、A Iを活用するなどはないのか。
- ◎： 例えば、陶磁器分野の釉薬での複雑な原材料の調合などにはA Iを活用

することで省力化できる可能性があると考え、検討してまいりたい。

○： 最後に、全体を通してのコメントや、第3期中期計画期間の最終年度である次年度に向けた提言や期待することなどあれば、お願いしたい。

○： 伝統産業と先進産業の融合を進められているが、京都には優れた先進産業が数多くあるので、ますます積極的に取り組んでいていただきたい。また、評価の検証についても、数値化して客観的に見られるようになっていることは重要であるので、引き続き取り組んでいただきたい。

○： これまで以上に職員の熱心さ、改革にかける強い思いを感じている。数値的には昨年度を下回ったものもあるが、数字で表れていないが内容が充実しているという部分も見受けられる。引き続き取り組んでいただきたい。

○： 評価が数値化されていてわかりやすく、説明も理解しやすかった。次の目標としてお願いしたいこととして、産業技術研究所の取組が地域経済にどのように寄与しているか、市民生活がどう向上したかなどといった点も追加いただきたい。

○： 多岐にわたり、素晴らしい支援をされていると感じた。一方で、研究員はセミナーの開催や広報の充実など多忙な状況にあり、腰を据えた研究を行うための時間がひっ迫していると推察される。例えば大学であればURAといった制度で研究者への負荷を軽減する取組があるが、適切な方法について検討を進めていただきたい。また、AIの活用については、現場の方が自ら工夫してAI技術を構築できるような、産業を強くするための支援を進めていただきたい。大企業、中小企業、伝統産業といった重層的な構造となっている京都産業の独自性を大切にしながら、今後も取組を進めていただきたい。

●： 質疑応答の中で、京都市の評価案の修正を求める御意見がなかったので、令和5年度の業務実績評価については、案のとおりとさせていただきます。

(3) その他

～事務局から今後の予定について説明～

【3 閉会の挨拶】

・京都市産業技術研究所からの挨拶